



× 佐々木啓太

vol. 3 細かいところまで
こだわってみよう

最終回である今回はさらに細かいところまでこだわったプリセットや、環境光の違いなどについて紹介しよう。

用途に合わせてプリセットを使い分ける

これまで、ハードウェアキャリブレーションや画面の広さ、使いこなしなどを解説した。今回は、あらためてCX240の魅力を探っていきたい。ちなみに筆者はCX240をEIZOのダイレクトショップで購入した。メーカーの販売サイトが充実しているのも魅力のひとつかもしれない(キャンペーンをやっているとお得になる)。購入したのは、CX240-CNX(EX2センサー付属+遮光フード) + 蛍光灯スタンドのフルセット。カラーマネージメントでは環境光も大切。この蛍光灯スタンドは色評価用の蛍光灯も付いており、必要な環境を一度にそろえることができる。実際、筆者のこれ以前の環境は、ColorEdgeモニターとセンサーだけであったが、環境光までそろえる

と作業効率はさらにアップした。

1回目で、ターゲットは「印刷用」と紹介したが、このほかに「写真用」と「Web用」のターゲットがある。それぞれ、センサーを使って測定しておけば、ColorNavigator上で簡単に変更できる。さらに「応用モード」を使うと自分のプリンターの出力に合わせて微調整することも可能だ。

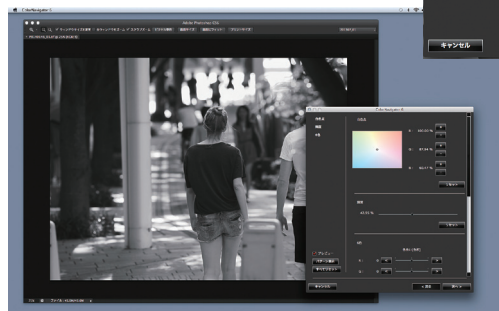
カラーマネージメントの基本は共有できる状態で画像を確認することであり、ディスプレイやプリンターなどの出力差をできる限り小さくすることだ。その結果、作業効率が高まりテストプリントの枚数も減って、時間的にも経済的にもお得になる。ぜひ、お試しを。

▶ メーカープリセットによる色の違いを理解する



色の違いがわかりやすいようにモノクロの画像で検証。メーカーが用意してくれているプリセットの主な違いは色温度。印刷用は5,000KでWeb用は6,500K、写真用は5,500Kとなる。明るさに関しては、写真用だけ100cd/mで、そのほかは80cd/mとなる。色味は写真のような感じで、Web用がもっとも青みが強くなっている。基本的には、プリントが基本になっているのであれば印刷用を使う

▶ 応用モードを使ってみよう



プリント結果とモニターの状態をさらに細かく追い込んでいける応用モード。キャリブレーションに慣れてから使うと考えてもいい。このモードを使うときは、プリントをみる環境をそろえておくことが大切

▶ 環境光にもこだわってみよう



筆者の作業環境

筆者は室内の光源を蛍光灯スタンド「Z-208-EIZO」だけにしていて、周りに強い色があるとその色の反射の影響を受けるので、できるだけグレーに近い環境がベスト。蛍光灯スタンドはモニターの斜め後ろ、モニター前面に反射が出ることもないが、モニターフードがあると作業により集中できる



● 蛍光灯スタンド「Z-208-EIZO」で見たプリント



● 蛍光灯電球色で見たプリント

